事情

村井靜馬著

明治太平記

九編

上

特
へ遠14
2504
26-17

門へ遠14
號 2504
米 26-17
特

村井静馬編輯
鮮齋永濯畫

官許

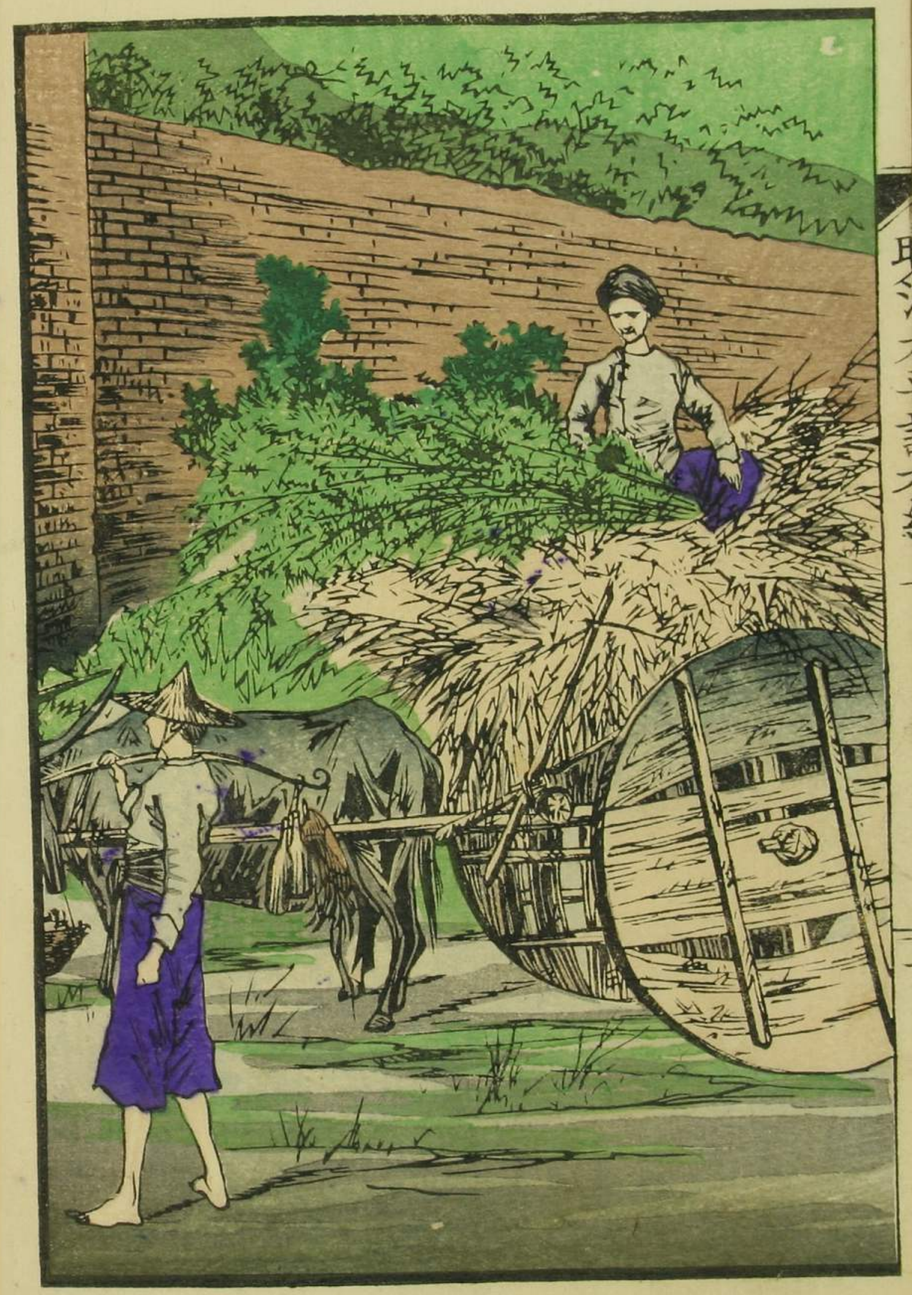
明治太平記 全

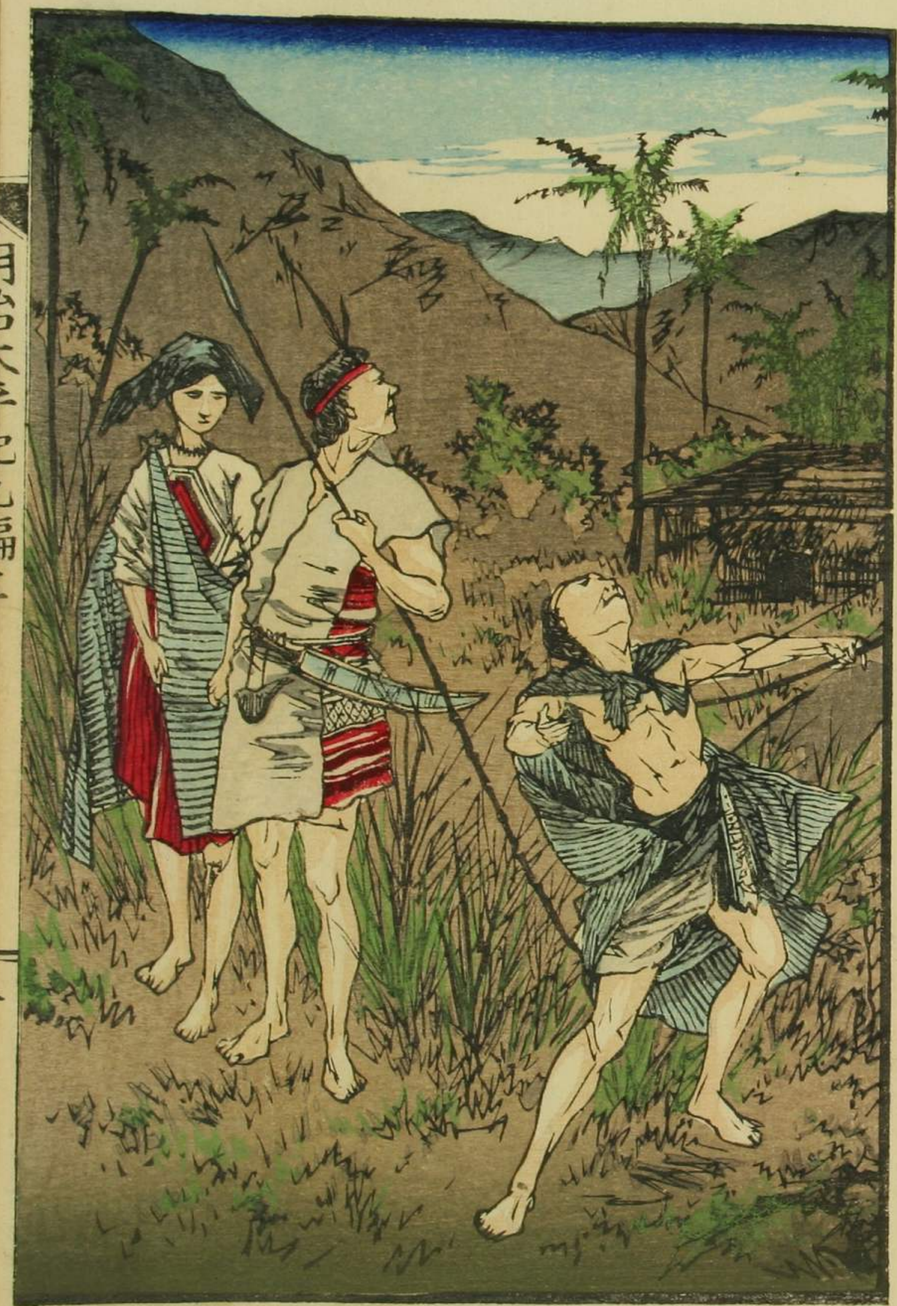
東京書林 延壽堂發兌

神功皇后三韓を征し豐太閤韓地を伐し以降王師を海外に臨しむる支這田臺湾の事件のみ原是孤島の蕃族と雖も清國表裏の言を吐きて為に兵器を動うるに於て輒ち大敵なり既に全權辨理大臣詔を奉ずして支那へ渡海に至る迄本編の一段落と北京の大議論より遂に渠が償金を得て愛度凱歌を諷ふの譯へ次の編に記載して總計十餘編を結局せんと看官編者の疏漏なるべ冝しく叱言なるん支を請ふ

村井静馬誌

熟蕃薯
路頭より
生業まる
図
福安城





生蕃山間ニ鳥獣魚類ヲ猟スル図

巻之弐

石門ゟ逼り〻精兵一計の下ゟ牡丹族狩狭撃ゟ〻酋長をさ〻討取るゟ始り三口の大軍奮發して蠻夷等ゞ巣穴を猟るゟ終る

巻之貳

将士等三谷狩驅く遂ゟ牡丹社ゟ會合るまて始り清國の議論紛紜たる故事の結落を定めんと大久保大臣支那へ渡らるゟ終る

明治太平記九編巻之一

東京　村井静馬著

再説薩州の徴募兵熊本の鎮臺兵等ハ牡丹族狩征せんと險を凌ぎく進む程ゟ彼石門の傍ゟ土蕃等胸壁を築き設けて多人數茲ゟ身を躲したゞ首そ〻ろ顕ハ〻く頻りゟ砲を発〻たる弾丸雨の如くなるゟ徴募兵等ハ夫と見く備ハ蠻賊彼所ゟ在り悉く誅戮ゟ〻く先度の怨〻く報えんと

俱ふ砲戦ゝ及ぶと雖も這方ゝ〻打玉ゝ〻
胸壁ゝ支へられゝ渠を傷つゝる誅ハざるゝ途嶮
ゝ〻ゝ且つ狭れを逼りて力戦做んとせば我が
兵を徒ゝ傷ふ支もいろやせんと茲ゝ乍ち一策を
設け鎮臺兵一小隊ハ山の裏手ゝ兵をまへし牡丹
族ゞ屯せし後ろの山ゝ攀登り敵を直下ゝ見るし
て小銃数発放ち掛れバ思ひがけゝる支ゝる故
土蕃等大いふ駭く所へ豫ゝ憤懣ゝ堪えざるし

薩州の徴募兵等ハ先ゝ争ひ進ゝ来りゝ彼胸壁ゝ
手をかけゝ攀登り旦つ躍り超へ何もも直ちゝ抜刀し
て慌忙く野蠻等を相手を撰ぶ斫立ゝ争でゝ敵を
る支ゝ得べき或ゝ胴伐り幹竹破その餘も手痕を
負ハぬゝ斷るくゝる散々ふ討るされ渓河又ハ岩壁の
最嶮しさを飛越ゆるゝ宛然猿の如くゝ命ゝ〻
辿行きたり此時土蕃の首ゝ得る支既ゝて十二級その
中ゝ牡丹族の酋長の首級ゝと案内者ゝ告しべ

兵士等愉快の色をなして稍凱陣に及びたり皆西郷都督に這回英國より購ふ所の銃造船と高砂丸と号して則ち之に乗組て臺湾港に着帆せり既に我が兵牡丹族と戦争最中なるを以て兵士若干を上陸させて應援の用に備へ都督に尚船に在りて陸地の動静を窺ましむ此とき社寮の近海に支那國の軍艦二艘碇泊なして居さりしが西郷の着船を見るより艦に件の軍艦より四五人の士官

来りて都督に謁せん支を請ふ事最も頻りなりしが次の日の十二時と約して面會に及び一処彼士官等の言へるやう郷に何等の故ありて頗る兵備を整へて此地に航海なりしやと詰るを都督い聞あへず去る辛未年明治四以来我國の漂民を此島の土人等が暴殺に及べる事箇様々の所為なるが故に去年全權大使を以て貴国の政府に談判せしに臺湾東部の地に於て支那の所轄に属さる旨返答に及ぶに一故

後来を誡めんが為問罪の師を向けたるかと事詳
かに演説せしかば彼の士官等へ兼伏をしけん却つて
都督の航海せしを慰めかどしつゝ辞して我が船に
飯りしが頃く件の支那船より我が日章の國旗に
向けて祝砲を發せし故這方よりも之に應じて報砲に
及びしかば姑くありて支那の二艦へ此地を退帆あり
とぞ此支果て西郷氏に附属の將士等伯俱に稍上
陸に及ぶや彼の海岸に遠ざかる亀山と言へる地或

選ばれて這所に本營を設けて之を都督府と称し
余が此地の土蕃等は廿二日の戦争に彼石門を破られ
て牡丹の酋長が首を失ひたりと聞くより日本勢の
勇猛を甚だ恐怖なしたるに這回都督の大軍を率
て入港なしたる為躰數門の大砲數挺の小銃錦の穂
先は宛然に秋の尾花の戦ぎに如き我隊伍整乱さ
列を正しく上陸に及びたる軍威四邊に輝き渡りて
目を駭かざるなぞ膽を消さざる者もなく熟蕃の

きんぢ
石門口ゐ
ラッパボータシ
我兵牡丹
ゐら
人等を襲
げき
撃ス

徒ハ言ふに及ばず生蕃族の其うちにも畏服なしる輩ハ
社寮の酋長〔ミア〕などを頼みて我が軍門に降る者日を
追て尠からざるは是に於て都督ハ参軍参謀等と列席
して彼の降参の酋長等を廳前に呼出し形容に武備
の嚴なる所を示し辞に信義の厚きを演べ是非の道理
懇ろに諭して感ぜ覚さまれば何れも感涙を拭ひあ
へず我輩常に牡丹人等が暴動に苦しむと雖も訴ふべき
方もなく又防ぐんにも力及ばず何との時ろ此患ひ既遂

べき事のなきを積年難苦を忍び居たるに神
軍此島に航海なりて渠等を懲して我々が憂苦を救
ひ給ふい實に天助を得たるなれば不日牡丹等の巣穴へ
御討入も在せらるべ御嚮導仕らんと異口同音に願ひ
出たる信實面に現れて詐りなきを見ゆるなれば則ち西
郷都督より或ハ刀劍或ハ小銃又ハ緋縮緬の類ひなど
成をもくに之を與へて慰情を表せらるべ渠等ハ
いとく好意を感ずして牛肉或ハ鶏などと思ひくの土産を

呈下して慮意あり躰と表はせり斯の如くみ土蕃等の畏服する者多くと雖も牡丹の社族等ハ廿二日の大敗あるも懲ず尚抗まゝき機會なり其他山深き野蛮等の降伏せざる族もいまゝ速ふ賊穴を襲ひ其成功を奏せんとす兵士等頻りに促まゝ則ち都督府よりく種々談判に及ぶれしみ何ぞ頑固なる彼の野蛮等を處置せんとハ一回兵威を示まゝいまゝぞ説諭の届くなるにあらざれ大舉ゝく山谷を獵り征まゝきいまゝを伐ゝ救ふまゝきを撫助まゝゝとく彼の酋長の中に於て心利たる者を召く向ふ所の地理方角を豫め聞糺ゝ来る六月一日を期ゝく進撃に及ぶべゝとて總勢三千余人の内十九大隊三小隊を残ゝて本営を守らゝめ其余の兵を三手に分ち一手ハ石門口より進ゝ一手ハ風港口より攻め入り一手ハ竹社口より襲ふく三方の兵遂に合ゝ牡丹社へ押詰めべきの軍議決定り及びゝく其手配り既

ゐま程より既より五月の末ようして日毎より霖雨降續きて
更より晴間のいろざるより別き六月一日ゟゟ篠つく如き大雨
ゐれども此日を以て進軍と豫て期しる支ある故諸
口の兵士等猶豫まる体なく就中石門口へハ都督自ら
向ふとゐるゆゑ徴募兵二小隊十九大隊一小隊海軍の
兵五十人大砲數門を歩卒より曳き佐久間中佐等こと
を指揮して彼の酋長等を嚮導者とゐし先隊と号
して進発せしふ素より嶮岨の道なるのみゟ途中より幾筋

ゟ川いりて常ゟあさせる流れよりぬも大雨の為より
水張りて甚ぞ渉るふ悩みしゞ第二の川より至りて底
の石をも轉ぶだゟ最も急流ある故より衆兵ものく手
を引合ふて早瀬を渡り越さんとする時鎮臺兵の歩卒
一人過つて轉びしゞ之を救ふよいるゐなく忽ちふ溺死せり
斯の如くの急流を尚二ッ程うち越へて四重溪庄と
る地より漸くより着陣せしゞ直ちふ斥候を遣ハ
して其近傍を探索ゐせども敵と覚しき者も見へず

石門口の
進兵雨中
を急流を
渡る

左右まるうち日も暮たれば當所の民家に宿陣しつ偖
次の日の早天より徴募兵を先鋒として既に石門まぐ攻
寄れど廿日の敗れに懲りん這所ふも支ゆる敵のひつ孫ば
尚も山路に分入る程に或い峩々たる断岸ひろ又ハ高草
生茂りく何も我道路と定めがたくを辛うじて辿りつ稍
大埔角と又るに到り是より牡丹の巣穴まてハ一里ばかり
の程とは見べ衆兵その身の労を忘れて頻りふ嶮路を進ま
行きーふ半途に大木を伐仆して小徑の通路を塞ぎー

うべ輙く進む支を得ず兵士等大いふ焦燥く帯劔を
抜く伐り拂ひ取除けんとまるうちふ何時の程ふ日の
暮たるべ是非なく傍の樹間に據てあつく野陣を布
けるゞ开ゞ中に徴募兵の彼大木を伐除けたる些の
虚間より潜り抜けく直ちふ牡丹社に攻入りしふ村中
家数十餘戸ばかりども土蕃等いまる逃去りて人影さへも
見へざれべ甚ぞ望み我失ひく思ふふも似ぬ奴原なる
と舌打まれど詮なさふ开処に宿陣るを程に夜明く

自餘の兵隊も彼大木を取除けく漸々ふ進ミ来れば
又西郷都督ふも後軍の兵を率へく此地ゑ出陣せら
ミしうど敵一人ふも出會わべ労して功ゑた心地せし
うべ又酋長等を召出して尚此外ゑ壮丹の捿やゑると尋
ねミべ是より後の山腹と南の方ゑる溪間ゑ捿と設け
し者ゆれども其道極めく嶮あると言ふ後兵士等
聞ゆ人ぞ先や其地ゑ向ハんとく徴募兵二分隊い案
内者を先ゑ立て彼の山腹へと進む程ゑ高く茂りし

草の中ゑ躾を伏したる蕃族ゆり突然として砲発せし
べ二個の士卒痍を負へり夫と見るより徴募兵等いも
ハや賊ゑ出會ふたれと彼草中へ筒を向けく乱
射せるを雨の如く或い刀と拔持て茂りし中へ分け
入りて四邊隈ふく獵れども何地へゑ逃去りて其形
さへ見留わべ兵士等いゆく憤怒ゑ堪ぞ尚も道ゑた
岩間を傳ひく頻りふ進ミ行く程ふ果しく蛮夷の
捿と覚しく三四十戸の小家ゆり庁端ゑり火砲

放ち燒拂へども抗ふ者なく其近傍まで探索されど絶て人氣も見へざれば詮術尽てまどくと元の陣所へ立返る又南方の溪間へい十九大隊一分隊襲撃よ及びーふ茲ふも些の家屋いなとど咸逃去りー躰ふる故放火ゐーて退けり夫い叔置き風港口へい谷参軍を大將として同日本営を進発ー風港とゝ人地ふ至り（此風港ハ熟蕃ゝ郷ふ降伏ゐせーあり）其夜ハ茲ふ宿陣ーの次の日の早天よ又彼の薩州の徴募兵と先鋒とーて真先よ進め谷氏ゝふ鎮臺兵の内二小隊を引卒せりまて漸次よ山間よ分入るふ嶮岨なるぎる所もあく殊更數ヶ所の急流の行く先々ふ横ゝりて深きハ二尺ふ餘るも此を之を渡るも輙ゝぬよ或ハ嶺よ攀登り或ハ谷よ下りるどーく往く支凡五六里許り遥ゝふ人家の連るゝ所ゝ這ハ爾乃社と号ーて牡丹族ふ劣らざる暴戾の者ゝるゝ故案内者ゝり報告ーゝば先隊の兵士等大いふ勇ゝて頓て件の一村落へ襲ひ蒐らんと

山岳ヨリ瞰テ野蛮等ヲ暗ニ狙撃サン

まる折々忽ち傍の山腹より小銃數發打掛らるあるを為よ案内者と小卒一個痛と負ふあり備る那所よ伏兵ありと此方も遠さず砲發し直ちよ是等の趣き後軍へ報知せしむ谷少將ふも差置くを一小隊を山手ふ廻しく敵の後ろ襲ハまるを徴募兵等いまだ烈しく頻りよ砲を打掛々彼の村落へ乱入せしむ僅ふ一個の蕃族発打仆したるのみしく其餘ハ何処へ逃失せしら岩壁茂林の

多くれバ遂よ其行く所を知らず左右まるるうち谷少將ふも後軍を引く進み来れバ又彼の山手へ廻せし兵も手薄空しくあて来るふそ此夜ハ茲の民家よ宿しく倘野蠻等ハ夜よ乗じ襲へる支ハらんと堅固よ備へを設けしらど夫等の支もなうしうび夜明く人家よ火を放ち悉く焼拂ひく頓て其地を発足ふし牡丹の方へと進みしふ途中ふ老女と少女とハ徐徴ひ居たるを見付たり老女ハ疾くも逃去りしらど少女ハ

更に逃もせず忙然として居たりし敵兵士等捕へて
本営に送り尚蕃族の棲やらると道もなく探索されど
敵一人も出會せず遂に牡丹社に至りしとぞ分れば
竹社口へと吉田海軍の大尉篠崎指揮長等の面々
徴募兵等を引卒して之を此手の先鋒として中軍を
福島参謀鎮臺兵等の隊を率ひ後軍は大將赤松参
軍近衛士官信号士官等是彼附属の兵士を従へ自
餘の二手に一日後れて六月二日に本営を發し又一方

の嶮路に分入り左右して彼石門の坂上に到りしが
此手い竹社。高士猾の両社を襲ひし其上にて牡丹
に寄せるの軍配なれば頓て案内者を召して件の両
社へ攻蒐る便路奈何と尋ねれば嚮導者等は指
さして左の山に寄るものい竹社等が棲まく右
なる山を一ツ隔て又東なる山腹に彼の高士猾の
巣穴なりと其方角を差示せば然らば手近き竹
社を撃て然して高士猾を襲いんとて左の方へ兵を

向け難所を凌ぎて往く程よ果しく些の人家いとれど咸逃去りく人影なし此時遥かに砲声の山よ響きく聞へしかば偖い石門口の兵ども牡丹社よ攻入りく砲撃みまと覚へり此手も劣らじと攻寄せんと彼の指揮長たる篠崎を徴募兵等茂激きく真先みく進む程よ是より先い殊更嶮しく辞よ演も盡されざりしよ往方よ岩壁聳へ立ちて宛然路の絶たるが如し仝とく爰ぢで辿り来く引返き

ぶたやうもみゝと先隊の兵士等憤發して彼の絶壁を登る丈九十丈ばかりみゝて僅かに平地に至りしが夫より道なき路を索めて行く。幾許里あるべく所々に小村ありと雖も逃て出會者もなければ尚進む兵を進むる程に茲に一條の流れあり最も早瀬なりしうど難所に慣れし丈夫なれば衆之に踏込みて渡り越さんとする折しも忽ち二人の敵ありて我を窺ふ躰なると兵士等速くも見出して蕃族彼所に見へるぞ疾く打取れと言ふよりちやくちやくの筒を差向けしかいなや砲発せざる間に賊徒等直ちに身を轉へして山手に逃さて逃行きしが其侭見へざりしぞ躰く諸方へ斥候を出して頻りに穿鑿する程に土蕃等路傍の草叢の最も深き茂に躲れて斥候の兵の近く来るを狙ひまるして砲撃せしが忽ち二個へ打殺され一個は疵を負へり此形勢を見るよりも指揮長篠崎大いに怒りて兵士に命じて抜刀なさめ

彼草中ゑ分入らせく隈ゑく之を猟ると雖も渠等い
何とゑ走りしゑ逃足甚ど疾くく其影をでも見留め
紛べ篠崎きく焦燥く劇く衆ゑ指揮く山手の
方へと攻登りく爰ゑ至りく蕃族等ゲきく出會らや
否やの譯へ次の巻ゑ委しく解くべし

明治太平記九編巻之一終